

2022年度の成果と課題

1. 学習課題等に対する自分の考えを持った上で、主体的な話し合いをさせるための手立て

【低学年】

- ◎大事な言葉や文にしるしをつけて自分の考えをまとめることで、多くの子が自分の考えをもつことができた
- ◎ゴールを明確にすることで、学習の見通しをもつことができた
- ◎前時の振り返りの時間を設定し、本時との関連性を意識させる時間をつくった
- △話すことが苦手な子どもがいたため、話し合いが一方通行になったり、深まらなかったりした
- △語彙力の差に開きがあり、自分の言葉でまとめられる子とそうでない子がいる

【中学年】

- ◎児童と教材の距離を近づけるような単元や本時の組み立て方の工夫を行った
- ◎目的を明確にした授業中の問い返しの精選
例) 「キーワードは？」 →聞く意識を持つため
「どうして？」 →理由を考えるため
- ◎体育科において、児童にとってなじみのある作戦を提示することで、イメージを持ちやすくした。また、作戦を可視化することで、主体的な話し合いが行われ、児童の中から独自の作戦が出てきた
- ◎自分たちでテーマを決めて「さいころトーキング」を行うことで、主体的な話し合いへの意識が高まった
- △「聴くこと」の大切さをの定着が弱いと、話すことばかりで「聴く」ことが弱くなる
- △個人差があるため、低次の児童は話し合いについていけない

【高学年】

- ◎段階的な問題意識を設定することで、自分たちにとって身近とは言えない「同和問題」を、自分ごととして捉えることができた
- ◎問い返しの精選を行うことで、児童の意識に合わせた必要感のある深めの時間となった
- ◎自分の考えをもたせる段階で生活経験とつなげることを重ねてきたため、自然な考えの広がりが見えた
- ◎中心発問で考えさせるだけではなく、児童の思考を予想した上で、より深く考え自分たちで友だちの意見を聞きたくなるように問い返しや補助発問を行ったことで、多様な意見を引き出すことができた
- △意識を焦点化したあまり、例えば「職業選択から同和問題」へと、意識をスライドすることが難しい
- △児童の考えを元に深めの発問を設定しようすると、他の児童の出場を削ってしまう恐れがある
- △考えは持っているも積極的に表出することが苦手な児童の考えを活かすことが不十分

2. 自己の変容を意識させるための終末の充実

【低学年】【具体的な手立てや、その成果】

- ◎全教科において全体のふり返しを行うことで、学習前と学習後の変化や変容を、児童自身が実感している
- ◎毎時間記録を残し、児童ができるようになったことを保護者に伝えている
- ◎本時のはじめに、前時のよいふり返しを紹介する

【中学年】

- ◎体育カードの中で、技（スキル）をランダムに配置しビンゴとして楽しむことで、自身の成長を実感することができた
- ◎ふり返りの視点として「予想と比べて」に絞って書かせることで、自身の理解度の認識に繋げている
- ◎社会科において、予想したことと調べた後の変化に気づくことのできる資料の用意することで、調べた後の自己の変容を実感させる
- ◎（毎時間が難しくても）単元の最初と最後に自己の変容を意識できる場を設定する
- △「わたこのふり返し」の活用が難しい
- △タイムマネジメント
- △低学年の場合「ノートをきれいに書くことができるようになることも変容」と捉えると、教師のノート指導の充実が必須となる

3. 学びの土台について

①大きな声で伝える手立て

【低学年】

- ・みんなが注目してから話し始める
 - ・一番遠くの友だちに聞こえる声で
 - ・教師の立ち位置
 - ・声が小さい子の発表のときは周りがシーーン
 - ・毎日の健康調べの時間で「はい、元気です。わけは～」を繰り返すことで定着を図る
 - ・発話量を多くする場を設定し、簡単な内容であれば全員発表とする
 - ◎確実に、声は大きくなってきている
 - △一部の子はどうしてもモジモジしてしまう
 - △児童が自身の声量を認識していないので、教師からの声掛けが必要となる
- ### ②話し手を支える聴き方の手立て

【中学年】

- ・おへそをむける
- ・聞いているなら反応をする
- ・反応が素敵な姿を広める
- ◎よい児童を真似することで、よい姿が増えてきている
- △型にはまりすぎた反応
- △学年があがるにつれ、体をむけて聴く姿が減ってくる
→積み上げた姿をつなげていく必要がある
- △誰かが話したら何かしら反応する意識を、全員に！

4. 生徒指導の三機能を生かした授業の展開について

①自己決定の場

【低学年】

◎課題や問題に対して、できるかできないかを児童に判断させる

→「できない」と判断した児童には、教師からChromebook上でヒントが届き、必要に応じてヒントを開いたりすることができる。(2-1)

◎Chromebookを使ってみんなの考えを提出(オクリンク?)させ、どのように考えたのかをみんなで共有する

◎体育科において、多様な活動の場を用意することで、自身で課題選べるようにする
△Chromebookを使用するためのスキルの向上

【中学年】

◎児童が自身の考えを表出することができるようにするための反復指導
(既習、経験から、「たぶん」でも)

◎ネームプレートの活用

→板書した発言内容の横に貼り付け

複数の項目に対して、自分の意思の位置づけ など

【高学年】

◎終末において「自分ならこういう事ができそう」と考える場を設定することで、課題に対してより、自分ごととして捉えられることができた

◎グループトークやネームプレートを活用し自分の意見や立場を表出する場を設定する
△自分で考ようとせず、安易に友だちの考えに乗ろうとする児童に対しての対応

②自己存在感

【低学年】

・教師からのボイスシャワー

・ペア活動の際に、反応やアドバイスをするように指導する

◎「自分は見てもらった!」と思いき喜ぶ児童が見られた

【中学年】

・グループで役割を決める

・ふり返りから出てきた友だちのよさを価値づける

・授業プランニングの際に、自身のクラスの児童の出場を考える

例)「この場面であれば、〇〇さんが意見を言いそうだな」など

【高学年】

・様々な表出方法(ホワイトボードの活用・プレゼン)を準備する

・グループ活動後の発表を輪番制にする

◎表出に慣れることで、前に出ることへの抵抗感が減った

◎確実に全員発言につながる(全員発表がいいわけではないが…)

△活用場面の精選

△タイムマネジメント

③共感的人間関係の育成

【低学年】

- ・帰りの会での「いいところ見つけ」
→見つけた子もすごい！見つけてもらった子もすごい！

【中学年】

- ◎前の児童の考えと自分と考えると比べながら発言させる
例)「～とにている」「～とちがって」
- ◎「いいところ見つけ」
例)事前に予告しておき、自学をみんなで見てよいところを探す
友だちの作品に対して鑑賞のコメントを書く
帰りの会でほめる など
- ◎気のおける仲良しの友だちだけに行かないように声がけ
→「誰にでも」の意識

【高学年】

- ◎ハンセン病という、自分から遠い問題に対して、自分ごとに設定できるように促すことで他者理解の意識が進んだ
- ◎前者の考えに「関連して、繋げて」という発言の仕方を定着させることで、学びの土台である「話し手を支える聴き方」に繋がった
- ◎体育科における、考える視点（動き）を明確にすることで、視点を絞った相手との対話が増えた
- ◎グループ活動後、友だちの考えを発表させる
→他の子の意見なら話しやすい+出してもらった人も密かに嬉しい（高学年）
→深める際に本人に返すこともできる
→更に表出がなかった際に「友だちの話聞いてなかったの？失礼だよな？」と迫ることができる